

## 琵琶湖におけるブルーギルの繁殖に関する新知見の紹介

中尾博行（滋賀県立大学大学院）・中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）・沢田裕一（滋賀県立大学）

1960年代に初確認された琵琶湖のブルーギルは1990年代以降に激増し、今や沿岸域で最も多い魚種のひとつである。本種は繁殖に際し産卵床を形成し雄親魚が卵、仔魚を保護する。産卵床は複数が隣接し、繁殖コロニーを形成する。演者らは2002年から2005年にかけて、琵琶湖北端部に近い伊香郡西浅井町において、ブルーギルの繁殖生態について潜水調査を行ってきた。これまでに得られた結果や観察された興味深い事象について報告する。

ブルーギルの繁殖は6月初旬（水温約20℃）に始まり、開始直後に繁殖のピークを迎えた。ピーク時には調査範囲内（差し渡し約100m）に80以上の産卵床が存在した。繁殖は8月下旬まで続いた。期間中の延べ産卵床数は年によって異なるが200～400産卵床に達した。産卵床は様々なサイズのコロニーを形成し、単独で存在するものから、最大48産卵床のコロニーが観察された。30産卵床以上が集合する大型コロニーは主に繁殖初期の6月に見られた。産卵床単位でみた繁殖の成功/失敗を調べたところ、繁殖初期に成功率が高く、また大型コロニーに属するほど成功率が高かった。調査地全体での繁殖成功率は、各年とも65%前後であった。卵・仔魚を狙う捕食者としてブルーギル、ヨシノボリ類、ヌマチチブ等が観察された。魚類以外ではカワニナ類・ヒメタニシを主とする巻貝類が産卵床に高密度に謂集していることが明らかになり、室内実験で巻貝類がブルーギルの卵・仔魚を捕食したことから、野外でも実際に巻貝類が卵・仔魚を捕食していると考えられた。

なお本報告の一部は、2006年5月に日本魚類学会から刊行される「魚類学雑誌」53巻1号に掲載される予定である。